

# マラカンド野戦軍物語

辺境戦争における一エピソード

ウインストン・スペンサー・チャーチル卿

マラカンド野戦軍

序文

「辺境戦争とは文明化の波の先端、そしてその進展を示すものである。」  
ソールズベリー卿、ロンドン市庁舎にて、一八九二年

「世界の公明正大さに従い、私に観客を与えよ」

「ジョン王」第五幕・第二場

ふだん私は序文というものを軽視している。もし著者が二、三〇〇ページもの文章を費やして、読者の心を捉えることも、本を書いた目的を説明することもできなかつたら、おそらく序文の五〇行かそこらでは何もできないだろうと思っている。しかし、一言二言何か喋りたいという誘惑は今も昔も非常に強いものであり、多くの著者はこの誘惑に抵抗できない。私もまた同じだ。

私はかつてマラカンド野戦軍に所属していた。その頃、ロンドン・デイリー・テレグラフ紙に一連の原稿を書き送った。これらの原稿は好意的に受け入れられた。私は大いに励まされ、さらに多くの原稿を書き送った。この本はその成果である。

私はもとの原稿をばらばらにして、自由に、適切と思われる一節、フレーズ、事実を活用することにした。文章・フレーズ・事実に含まれる観点に変更はない。しかし、いくつかの意見や表現は、宿営地の爽快な雰囲気の中では穏やかなものに思えたのだが、現在のより穏やかな雰囲気にはそぐわなくなつたので変更した。

私は多くの勇敢な将校たちが取材に協力してくれたことに感謝しなくてはならない。将校たちは名前を明かさないうちに私に求めた。しかし、この頼みを受け入れてしまうと、マラカンド野戦軍の話から勇敢な行動と最高の個性とが奪われてしまうだろう。

この本では辺境問題の難しさを扱うつもりもなく、辺境問題の局面や特長の完全な概要を示すつもりもない。最初の章で、私はインドの辺境に住む数多くの有力部族に共通してみられる特徴を描き出そうとしている。最後の章で、私は平凡な人物の知性を専門家による莫大な量の証言（それはあまりにも莫大なもので、記憶を混乱させ、忍耐を強いるもののだが）に適用しようとしている。残りは物語であり、その物語の中で私は見たままのことを読者にお見せしたいと思っている。

本文の中では、全ての出来事を描き出すことができなかつたので、付録に公式文書を含めておいた。

大英帝国の抱える問題について、私は某政党のパンフレットに書いたことがある。しかし、この内容が英国民を侮辱するものではない、ということは公平な目で見れば受け入れられることだろう。私は起こったことをそのまま事実として、またその出来事から感じたことをそのまま印象として記録してきた。特定の個人や主義を糾弾するような意図は全くなかつた。確かに私は誰も攻撃しないようにと思つてきたのだが、あらゆる者を攻撃してしまつたかもしれない。中立性は恥ずべき孤立へと暗転することがある。読者からの良い意見が私の主たる野心において、そしてその完成において唯一の支援だつたように、真実を見極めようとする誠実で偏りの無い努力は私の唯一の防御策である。

## 第一章 戦争の舞台

ギルザイの首長はこのように返事を書いてきた。「われわれの道は狭く、切り立っている。太陽は烈しく谷を焼き、雪解け水は谷深く流れる。・・・よそ者には安全なエスコートと勇敢な友の誓いが必要である。」

「首長（アミール）からの手紙」 A. ライアル卿

インドの北および北西の辺境に沿って、ヒマラヤ山脈が広がっている。ヒマラヤ山脈は太古の地殻変動によって生み出された地球表面の巨大な障害物である。幅四〇〇マイル近く、長さ一六〇〇マイル以上にわたって、この山脈は中央アジアと南アジアの平原を分離し、あたかも海峡が向かい合う海岸を引き離しているように、大英帝国の東方領土とロシアの領土とを分割している。この大地の隆起の西端はヒンドークシュの峰々によって構成されている。その南側が本書で何ページにもわたって展開される話の舞台である。

ヒマラヤ山脈は線ではなく、山々から成る広大な領域である。デイル、スワート、またはバジヨールの山道あるいは見晴らしの良い場所に立つ者は、大西洋のうねりにも似た、見渡す限りの大地の隆起を見る。そして、さらに遠く、さらに高い場所に、白い冠を戴いたブツポウソウを思わせる輝く雪の山頂を見る。毎年降る土砂降りの雨は山々の側面の土壌を洗い流し、無数の水流

によつて奇妙な溝を形成し、また、そこかしこに黒い原始の岩を露出させている。沈泥や堆積物は谷を埋め、上から下まで広い範囲にわたつて、谷の表面を砂だらけにする。また雨は、この柔らかな沈殿物の間に、広く、深く、そして常に変化し続けながら流れる水路を形成する。雨によつて形成された水路は深さ七〇フィート、幅二〇〇〜三〇〇ヤードに達することがある。これらの水路はインドではヌラーと呼ばれる。小さいものは普段は乾いており、大きいもののみ水が流れている。しかし、雨期になれば、豊富な水が全てのヌラーにあふれ出し、二、三時間の間に小川は渡れないほどの急流になる。河川は渦を巻いて岸を削る奔流になり、年々、水路の深みを増していく。

山々は谷床から急に立ち上がっている。山々の急でござつた斜面には大きな岩が厚く散らばつており、ところどころに草が蔓延っている。高い尾根には松がまばらに生えている。水路にはたまに、ロンドンの公園やパリの大通りのプラタナスの東洋版ともいふべき美しいチエナーの木が見られる。チエナーの木は心地よい木陰を提供するので、人々はこの木に感謝の意を表する。山の斜面の上方には、長らく忘れられた人々によつて作られた狭い段々畑がある。これらの段々畑は雨によつて土壌が流出するのを防ぎ、大麦やトウモロコシの栽培に使われる。川の両岸に沿つて広がる稲田は、幅広く曲がりくねつた鮮やかな緑色の空間となり、山々の悲しい色ばかり見せていた目をひと時休めてくれる。

春になると、谷は野生のチューリップ、牡丹、クロッカス、そして数種類のポリアンサスといった花々によつて光り輝く。そして、人の手が入っていないにもかかわらず、スイカ、小さなブドウ、桑の実といった素晴らしい果実が得られる。しかし、これからこの本で語られる従軍期間中、夏の暑い太陽は全ての花々を焼き尽くしてしまつており、ただわずかに、玉虫織りの絹のように、光によつて青や緑に色を変える羽を持つ華麗な蝶だけが、地形の厳格さに対して対照をなしていた。

しかし、言うまでもないが、谷は決して荒野ではなかつた。土壌は豊かで、雨量も多く、土地の多くは耕され、住民に必要なものを十分に供給していた。

川には魚が多く生息し、マスやマハシアもいた。岸边にはコガモ、ヒドリガモ、野鴨が、そして場所によつてはスナイプがたくさんいた。山に行けば、ヤマウズラ的一种、チコールやキジの仲間が獲れた。

ハンターたちは、この地域の野生動物の中でもとくにヒゲマ、クロクマ、時として、ヒョウ、マーコール、そして数種類の野生ヤギ、ヒツジ、アンテロープ等を狙っていた。より小さい四足



動物としては、野ウサギやアカギツネがいた。これらは非常に明るい色の毛皮を持っているという点でのみイギリスの品種とは異なっていた。また、とても興味深く珍しい種類のラットもいた。美しさに欠けるものの、無益ではない動物としてアクリクイが良く見られる。しかしもつともよく見られる動物は、三フィートはあるうかというおぞましいオオトカゲである。これは皮が弛んだクロコダイルに似ており、腐肉を食べる。以上の動物たちに、飼育されている鳥、ヤギ、ヒツジ、そして牛、さらにいつも見かけるハゲワシ、また時々見かけるワシを加えればこの地域の動物を網羅することができる。

これら全てのものの上に、明るく青い空と強烈な太陽が存在している。これが戦争の舞台の光景である。

この荒涼としながらも豊かな溪谷に住んでいるのが、同じような特徴を備え、同じような状況に置かれた多くの部族である。暖かい太陽、大量の雨、肥沃な土壌によって育まれた膨大な量の作物によって、無数の好戦的な人々の生活が支えられている。種まきと収穫の時期を除いて、常にこの地域全体には確執や闘争が繰り返り広げられている。部族同士が戦争を展開している。ある谷の住人は隣の谷の住人と戦う。個人間の戦闘に村落間の争いが加わる。あるカーン（領主）は家臣の支援を受けながら、別のカーンを攻撃する。どの部族民も隣人に対し、血の復讐を誓ってい

る。どの男の手も他の男に向けられており、全ての男の手はよそ者に向けられている。

彼らの鬭争は、好戦的な人種がよく使っているような原始的な武器によって行われているわけではない。ズールー族の獐猛さにアメリカ先住民の狡猾さとポーア人の射撃技術が加わっている。「無慈悲な文明の力」というぞつとするような光景が展開されている。よそ者は一〇〇〇ヤードも移動しないうちに後装式ライフルで狙撃される。狙撃者は倒れたよそ者に近づき、南洋の島民のような獐猛さで旅人を切り刻む。一九世紀の兵器が石器時代の蛮人たちの手にあるのだ。

あらゆる影響、あらゆる動機が山岳民を悪逆非道な暴力行為に駆り立てる。人類が受け継いできた太古からの強い殺人性向が、この溪谷では他に類を見ない強さと勢いで保存されている。彼らの宗教、それは全てのものの上に君臨し、剣によって布教されたものである。その教義と原理は殺戮への衝動を駆り立てるものであり、三大陸において戦闘人種を育ててきた。彼らの宗教は山岳民を野蛮で無慈悲な狂信的行為に駆り立てる。山岳民の性質の一つ、略奪欲は、南部の都市や平野が見せる豊かさや豪華さによって育まれた。かつてのスペインにも劣らない几帳面な社交儀礼がコルシカと同じくらい執念深い復讐心によって支えられている。

そんな社会状況では、全ての財産は暴力によって獲得される。すべての男は戦士である。男は

封建領主の兵士のように、あるカーンの家臣であったり、中世の中産階級のように、所属する村落の武装勢力の一員であつたりする。そんな状況下であるので、私たちはさしたる困難も感じずに、一人の野心的なパサン族の男の興亡を思い浮かべることができ。

最初、その男は、かつての持ち主を追い出して以来所有している土地の一面で、農学者のような熱意と儉約精神を持つて農業を営んでいる。彼は密かに金をため、ある豪胆な泥棒からライフルを購入する。そのライフルは泥棒が命がけで辺境警備の駐屯所から盗んだものだ。農学者のようだった男は人々から恐れられる人物になる。彼は自宅の隣に監視塔を建て、周囲の村人たちを威圧する。やがて村人たちは彼の権威に屈服する。今や男は村を支配している。しかし、彼はさらに高みを目指す。彼は、あるカーンの城館に対する襲撃に加わるよう、村人たちを説得したり強要したりする。襲撃は成功する。カーンは逃げるか殺されるかする。城館は占領される。カーンの家臣たちは征服者に従うことにする。土地所有は封建制度そのものである。土地所有が認められる代わりに領民たちは新たな支配者の軍役に就く。もし、この新支配者がよそのカーンたちよりも領民を大切に扱わなかったら、領民たちは武器をよそに売り払ってしまうだろう。新支配者は領民たちを大切にする。人びとは新支配者を頼る。新支配者はさらにライフルを買い集める。彼は周辺の二、三のカーンを屈服させる。今や彼は地域の権力者である。

多くの、いや多分すべての国家はこのようにして成立してきた。また、これは文明が初期段階

で酷くもたついているところでもある。しかし、この山岳地帯では、人々の好戦的な性質、抑制への憎悪が、文明の次の段階に進むことを阻んできた。私たちは、有能で大胆で勇氣のあるパサン族の男が権力を握るために戦い、敵を吸収し、融合し、より複雑で相互依存的な社会を築くところを見てきた。彼は今のところ成功している。しかし、彼の成功は滅亡へと転じる。敵対者が男の前に現れる。周囲の部族の族長たちとその信奉者たちが村民たちの支持を得る。この野心的なパサン族の男は数に押され、打倒される。勝者たちは口論の挙句、すべてを台無しにする。そしてこの話は始まった時と同じように血と暴力の中で幕を閉じる。

これまでに話したことから想像がつくように、各部族の生存条件は各部族が武装し、定住している場所に依存している。もしある部族が谷あいに住んでいけば、彼らはマスケット銃用に開けた狭間を持つ塔や壁に守られていなければならない。小山の窪みに住んでいる部族は初めから有利な場所にいる。頑強で、勇敢で、十分な武器を備え、常に戦争で鍛えられた武装民によつて守られている部族もある。

騒乱が常時起きているせいで、怪我など気にかげず、生命を軽んじ、安易に参戦するような氣質が形成される。そして、アフガン国境の山岳民は、感情を見せずに戦い、気に病まずに殺戮をするような人間となる。このような氣質に、法や権威への敬意の欠如や平等性の確信が加わって、

英国との軍事衝突が頻発する原因となっている。ささいなことで敵意が生じる。山岳民は突然、国境の駐屯所を襲撃する。そして撃退される。山岳民の観点では、これでこの戦いは終了である。山岳民の最悪な運命論の中では、公平な戦いがあるだけである。山岳民はなぜ「政府（シルカール）」がこうした事件を大げさに取り扱うのか理解できずに悩む。モーハンド族が越境した場合には、政府側のシャブカドル城塞が応戦すればそれで終わりのはずである。しかし、政府はモーハンド族を撃退しただけでは満足せず、モーハンド族の領土を侵略し、罰を課す。モーハンド族はこのことに驚き、悩む。またある時、マムンド族は、村が焼かれたという理由で、第二旅団のキャンプに夜襲を仕掛ける。マムンド族にとってはこれで引き分けである。しかし、第二旅団がそれを認めないのでマムンド族は驚く。

山岳民は、お互いに争っている時には多少の遺恨に耐えるし、仲間の死を乗り越えて敵と友情を育むことも稀ではない。祭りや競馬などのために作戦を中止することもある。戦いの後には、即座に親密な関係が再構築される。矛盾に満ちているというのが彼らの性質なので、親密さと一族の血の復讐の誓いとが併存することになる。彼らの倫理体系では裏切りや暴力は悪徳というよりも美德と見なされている。彼らの倫理体系は論理的な頭では理解できない、奇妙で一貫性のない社交儀礼を生み出す。もし、ある白人がこの倫理体系を完全に把握し、山岳民の心の動き、例えば、どんなどきに白人の味方をするのが山岳民にとって名誉なことなのか、逆にどんなどきに

白人を裏切ることが名誉なことなのか等々を理解したならば、その白人は状況を判断しながら、山から山へと無事に移動できるだろう。しかし、文明化されたヨーロッパ人の多くはこのような芸当を実践できないだろうし、この、まるで顕微鏡で見る微生物のように、共食いし合つて悦に入っている奇妙な生き物の感情を理解することもできないだろう。

私はパサン族の好ましい気質の一つである、非戦闘員としての女性たちの取り扱いについて喜んで述べたい。これは荒っぽい騎士道精神に影響されたもので、絶え間ない争いの中でも順守されている。多くの城塞は水たまりや泉からある程度離れたところに建てられている。城塞包囲戦では、包囲側の兵士たちは、守備側の女性たちが夜間に汲んだ水を城塞のふもとに置くことを許す。朝になると、守備側の兵士たちは、砲火の下、その水を取り、抵抗を続けることができる。しかし、軍事的なことから社会的なことへと話題を転換すると、女性たちの生活は暗く、どんな美德を以てしても救いのないものとなる。彼女たちはむさ苦しい、穴の開いたあばら家の中、汚れと無知に囲まれて暮らしている。人間性の淵にどんな民族よりも劣っている環境で、虎のように熾烈で、しかし虎の様には清潔ではなく、危険で、さほど優雅でない生活を送っている。理想主義者が原始的な人々が常に備えているものと考えているような、家族の素朴な美德というものとは全く存在しない。妻やその他の女性たちには動物と同じような地位しか無い。女性たちは自由に売り買いされ、場合によってはライフルと交換される。

山岳民たちの間では嘘がまかり通っている。ある典型的な事件によつて、彼らが宣誓というものをどう考えているかということがわかる。土地の境界を巡る争いではいつも次のようなことが起こる。紛争当事者はコーランを携え、絶え間なく誓いの言葉を唱えながら、自分の主張する境界の周りを歩いて回る。誓いの言葉を唱えながら境界を侵すことに困難を感じたら、紛争当事者は自分の土地の土を靴に入れて、紛争相手の土地に足を踏み入れる。紛争当事者同士、両方ともこのようなトリックに通じているので、鬱陶しい嘘の宣誓はいつも早々に放棄され、力による解決に移行する。

全ての山岳民は鬱陶しい迷信にとらわれている。ジアラット、つまり聖廟の力は絶大である。病気の子供たちは水牛の背に乗せられて、六十から七十マイル程度運ばれ、聖廟の前に置かれる。そして、もし子供たちが帰りの旅路で命を落とさしえなければ、子供たちは行きの旅と同じように運ばれていく。哀れな子供が水牛の背に揺られながら苦しんでいるのを想像するのは辛いことである。しかし、山岳民はこの措置は、異教徒のもたらすいかなる治療法よりも有効であると考えている。杖を突きながら聖廟に赴くことは願いの成就を確信させるのに十分である。座つて石や色のついたガラスのボールを揺らしたり、紐で木からつるされたり、修行僧によつて木に縛られたりすることは、良い跡継ぎの男子を得るための確かな方法である。牛によい牛乳を出させるためには、聖人の墓の近くのお気に入りのお石に漆喰を塗らなくてはならない。これらはほんの

一部の例にすぎない。しかし、文明人が笑うべきか嘆くべきかわからないような精神の発達レベルを知るためにはこれだけで十分だろう。

山岳民の迷信によって明らかになるのは、「ムラー」とか「サヒブザダ」とか「アクンザダ」とか「ファキール」とかいつた無数の聖職者の横暴さである。これに、放浪する「タリブーウル—イルム」のホストが加わる。「タリブーウル—イルム」というのはトルコの神学生にあたるもので、人々の施しで生活している。さらに聖職者たちは「初夜権…ドゥワ・デュ・セニエル (Droit du Seigneur)」を享受しており、人妻でない者たちや娘たちは彼らから逃れることができない。聖職者たちの立ち振る舞いや道徳は口にするもはばかられるぐらいだ。マコーレーがウィッチャリーの劇について言ったように「彼らは、スカンクが獵師から守られているように、批判者から守られている」。彼らは「安全である。なぜなら彼らは触れることができないぐらい不潔で、近づくことができないぐらい悪辣だからだ。」

しかし、こんな野蛮な人々の生活であつても、美の愛好家が山岳民の希望や恐怖に共感を持つようなひと時が全くないわけではない。夕べの冷たさの中、アフガニスタンの山々の陰に太陽が隠れ、谷合が素晴らしい黄昏に満たされるとき、村の老人たちは水辺のプラタナスの木へと歩き、男たちはライフルを磨き、あるいは水タバコを吸い、女性たちはビーズや丁子や木の実で粗野な



装飾品を作り、ムラーは夕べの祈りを唱える。わずかな白人たちがこの光景を見、戻つてこの光景を話す。

しかし、山岳民の間には、武器や家畜の値段、収穫の見込み、村落でのゴシップから、年々南から迫りくる列強の情報まで、様々な事柄が話題に上つていくことが想像できる。多分そこには、かつてセポイ（傭兵）だったベルチ族やパサン族の男もいて、ペシャワールのバザールでの冒険を思い起こしたり、かつて仕え、共に戦つた白人将校のことを語つたりしていることだろう。元傭兵は白人たちの危険をもともしない武勇、彼らの奇妙なスポーツ、広範囲に及ぶ「政府」の力（その政府は幾月経とうとも元傭兵に対して恩給を定期的に支払うことを決して忘れはしない）などについて語るだろう。元傭兵は聞き手に対して来るべき日のことまで予言するかもしれない。やがて自分たちの住む谷合も強大な機械に支配され、裁判官や徴税官や弁務官がアンベイラの統治に来たり、ナワガイの地租を決定したりするだろうと。

するとムラーは声を上げ、聴衆に過ぎ去つた日のことを思い出させるだろう。かつて預言者の息子たちが異端者をインドの平原から追い出し、デリーの地に拠点を置き、カフィール族が現在支配しているのと同じくらい広い帝国を治めていたことを。また、真の宗教が誇らしげに世界に広がり、山々においても無視されたままではいらなかったことを。またかつて、強力な支配者がバグダッドを治めていて、全ての男たちが唯一の神だけが居ることを知っていて、ムハンマドがその預言者であることを知っていたことを。ムラーの言うことを聞いていた若い男たちはマテ

イーニのような酒をつかみ、アラーに祈ることだろう。侮辱され脅かされているイスラム教徒に加勢するよう、いつの日かアラーが遙か彼方から指導者をもたらすようにと。

というように、この国の一般的な景観と住民の特徴を簡単に描写した。今の段階ではより詳しい記述は必要でもなく、望ましくもない。これから叙述が進むにつれて、読者は陰鬱な山々やその陰に住む人々について、より生々しい印象を感じ取ることだろう。

私が語らなければならないのは、ある辺境紛争についての話である。問題の重要性においても、戦闘員の数においても、ヨーロッパにおける戦争には及ばない。この辺境紛争の結果は諸帝国の命運を左右しない。しかし、この物語は興味を引かないことはないだろうし、考察の材料にならないこともないだろう。

文明国間の争いでは強大な軍隊、何千と言う強者が衝突する。いくつもの旅団や大隊が急ぎ立てられ、戦闘区域に到着し、集中砲火や密集した銃兵によって薙ぎ払われる。何千何百の兵士が負傷し殺される。生存者は啞然茫然とした状態で、近くの身を隠せる場所に逃れようと必死にあがく。後方から新たな兵士が次々に投入される。やがて敵味方どちらかが撤退する。この混乱、この大規模な殺戮の中では個人やその感情は無視される。軍隊だけが物語の対象になる。そんな大規模な出来事のなかでは、人間の希望や恐怖、強さや弱さは区別できないかのようなのである。騒

音と塵埃の中では破滅以外はほとんど見分けがつかない。

しかし、辺境の朝の鮮明な光の中、山腹に点々と煙が立ち上り、刀剣によって山の峰が輝くとき、もし観客がいれば、彼はあらゆる種類の人間の勇猛さ、例えば、ガーズイの野蛮な狂信性、シーク教徒の冷やかな運命論、英国軍兵士の頑強さ、英国軍将校の悠々とした大胆さ、などを観察し、それらを正しく認識することだろう。観客は献身、自己犠牲、冷めた皮肉、厳しい決断などの出来事について何か述べるだろう。観客は荒々しい情熱、野蛮な怒り、周章狼狽の瞬間を共有するだろう。司令官の技量、兵士の質、兵法の普遍の原理、といったものがまるで歴史の舞台に置かれたかのように明白に展開されるだろう。統計学で扱うような大規模な出来事ではないというだけだ。

一杯のシャンパンは高揚した気分をもたらす。神経は安定し、想いは快く回り、機転はよく利くようになる。瓶丸ごとの酒は逆効果である。飲み過ぎは昏睡状態を引き起こす。戦争についても同じことが言える。酒も戦争もわずかに味わうことでそれらの質が良くわかる。

私は、マラカンド野戦軍の軍事作戦を記録し、その政治的な結末を追い、そしてもし可能ならばインド高原の風景と人々を描き出したいと思う。本書は勇敢で有能な人々の行動の記録となるだろう。本書は辺境戦争の偉大なドラマに別の視点を投げかけるだろう。本書は、わが民族が永

遠に継承していくかのように思える帝国のために、絶え間なく練り広げられている戦いの中の一つのエピソードを描き出すだろう。本書はいい暇つぶしになるだろう。しかし、私の野心は、この本が民主制下の大英帝国が海外領土に対して持ち始めた興味をわずかであっても刺激することである。

(二〇一三年七月三〇日、仮訳)

(二〇一八年三月二三日、修正)

## 第二章 マラカンドキャンプ

「私はたまたま『ウイア・サクラ』\*を歩いていた」 ホラティウス

ノウシエラの街と駐屯地は、マラカンド野戦軍の全作戦を指揮する本拠地だった。ノウシエラはカーブル川のインド側にあり、ラーワル・ピンディ<sup>†</sup>から鉄道で六時間のところに位置する。平時には、現地人騎兵一連隊、英国人歩兵一大隊、現地人歩兵一大隊が駐屯している。戦時には、これらの兵が前線に派遣された。ノウシエラ駐屯地の兵舎は巨大な病院になった。駐屯地全体が輸送手段と軍需物資で一杯になった。わずかな兵力だけが基地司令官シャルチ大佐の下に残っていた。

ノウシエラからマラカンド峠、そしてマラカンドキャンプまでの道のりは四十七マイルであり、

\* ローマの通りの名、「神聖なる道」の意

† 現。パキスタン北西部カイバル・パクトウンクワ（ハイバル・パフトウンハー）州の中心都市

‡ 現。パキスタン北部パンジャーブ州北端の都市

四段階に分かれている。この道中には便利なタンガ（軽量二輪馬車）が常に提供されており、六時間で移動することができる。しかし、野戦軍が動員されたときには、あまりにも多くの物資や兵士が移動したため、タンガを引くポニーが衰弱しきって使えなくなり、移動時間が九から十、場合によっては十二時間に伸びてしまった。ノウシエラを發つてカーブル川を越え、十五マイル進むとマルダン\*に到着する。これが第一段階である。マルダンはコープス・オブ・ガイド<sup>+</sup>の恒久駐屯地である。そこは日陰が多く快適な場所だが、夏には恐ろしいほど暑くなる。素晴らしいポロの競技場と快適な休憩所があることがマルダンの自慢である。マルダンを通過する者は足を止めてコープス・オブ・ガイドの墓地を見るべきである。連隊墓地としては世界でも唯一のものだろう。辺境の戦いで死んだ歴代の国境監視兵たちは、彼らがポロに興じた場所の近く、彼らが住んだ兵舎の近くの椰子の木の下で静かに眠っている。

マルダンを過ぎると道は埃っぽくなり、田舎の乾いた不毛の土地に囲まれるようになる。（ただしこれは秋の場合で、冬や春には緑に覆われ、空気は澄み切ったものとなる。）タンガが進むにつれて、山々は近づき、その形や色はよりはっきりとしてくる。平原から盛りあがった円丘や尾根は長大な丘の列の始まりを示している。カーブル川の支流、ジャラーラー川の浅い流れを横

\* カイバル・パクトウンクワ州で二番目に大きい都市

+ 歩兵と騎兵で編成された英領インド軍の連隊

切ると第二段階に至る。平時には小さな土塁だけがあつたが、戦争が近づくにつれて、この土塁は塹壕に囲まれた野营地（キャンプ）に拡大された。そこは放棄された場所なので、ポニーを付け替えるためだけにいったん止まった後、再び旅を続ける。道の両側に並んだ木の列は途絶えた。道は山々へと伸びる一本の白い筋のように見える。道を進むとうだるような暑さと息苦しくさせる埃に見舞われる。このあたりは赤く彩られ、不毛で、焼け焦げている。前方には巨大で黒く不気味な山々の壁が立ち上がっている。やがてマラカンド峠の麓、ダルガイ\*に至る。ここにもまた土塁があるが、様々な作戦の間に塹壕と鉄条網に囲まれた野营地に拡大されている。いまや山々の線の間の巨大な裂け目としてマラカンド峠が見える。そしてその溪谷のさらにはマラカンド峠を守る要塞の輪郭がはっきりと見える。

傾斜した道はあちこちで曲がりくねりながら、やがてダルガイから峠の頂上まで続く長い坂となっていた。御者は惨めで痛々しいポニーの背中を絶え間なく鞭打っていた。やがて頂上が近づいてきた。そこからの眺めは馬の歩みを止めて見るだけの価値がある。振り返ると、眼下の熱い靄の向こうに、滑らかな平野が朦朧とした地平線まで広がっているのが見える。タンガは角を曲がり、新たな世界に入る。冷たい風が吹いている。ただの一步で平和から戦争へ、文明から野蛮

\* カイバル・パクトウンクワ州マラカンド郡の一地区

へ、インドから山国へとつながってしまったのだ。どちらを見ても粗暴な景色が広がっている。山また山。谷また谷。どの方向を見ても見渡す限りガタガタの峰だらけだ。平原の国を離れ、私たちはハンプトンコート迷路のように入り組んだ、しかし生垣ではなく山々で構成された奇妙な土地に入ってしまった。この土地があまりにもガタガタでめちゃくちゃなため、私はこの土地の明確な印象を伝えるのをあきらめた。

マラカンドは、縁が壊れて無数の裂け目やギザギザが生じている巨大なカップのようなものである。このカップの底に「クレーター」キャンプがある。もともと深い裂け目がマラカンド峠である。ギザギザの中で最も高い場所がガイド・ヒルであり、その尾根に要塞が建っている。こんな場所を守るためには特別な知識はいらぬ。ただカップの縁を維持すれば良いだけだ。しかし、このマラカンドのカップは小さすぎて守備に必要な兵力を置くことができない。だから軍事的な観点から見ると、この場所は総じて守備不可能である。守備の方法の見直しや改善が行われ、敵が侵入する可能性がある場所を見張り、また敵が意のままに行動できないよう、鉄条網などの障害物によってブロックするような準備が行われてきた。そして慎重な作業によって、カップの縁のほとんどの部分が保持されている。しかし、今になっても私はこの場所には向いていないと言いたい。というのも峠は要塞によって維持されているだけであり、ここにいる旅団は、むしろダルガイに引き上げた方がより安全で有効に機能するだろうと思うからだ。この物語が始ま



った時、マラカンド南キャンプには兵を配置することが不可能だった。そこは敵の侵入を簡単に許してしまうところだった。そこは狭く、周りの高みから丸見えだった。(この戦争以降行われてきた準備によって、マラカンドとチャクダラおよびダルガイの拠点は二個大隊その他によって保持されるだろう。また、これらの地点は今のところ正確な位置も編成も定かでない遊撃隊によって支援されるだろう。)

コタルに置かれたキャンプは面積が小さく、カル平原に第二キャンプを必要としていた。そこはカップの北側の外縁の麓に近かった。政治的理由からその地は北マラカンドと呼ばれていた。北マラカンドも陣地としては根本的に不適切な場所だった。そこは見通しが良く、谷間や水路に囲まれており、敵が攻めるのには好都合だが、守備隊が脱出するには不都合だった。当然のことながら、戦略的な価値はなく、また、クレーターや要塞に入りきれないマラカンド守備兵の居住地となることもなかった。北マラカンドキャンプは完全に放棄されていた。

しかしながら、誰一人として、マラカンドにいる者ですら攻撃を受ける可能性を予測していなかったようである。確かに全ての状況は全く一時的なものだとみなされていた。英国における政権の交代や政策の変化によって引き起こされた動揺のせい、マラカンド駐屯地は二年もの間、机上でも現実的にも有効に守備できないような状況のまま放置されてきた。一八九五年のチトラ

ル戦役のあと、マラカンドへの旅団の進出はほんの二、三週間のことだと考えられていた。しかし、マラカンドへの駐屯がはつきりしないまま数か月が過ぎるにつれ、これは恒久的なものではないかと考えられるようになってきた。将校たちは自分たちの判断で小屋やみすぼらしい部屋を設置した。カルの近くにポロにふさわしい場所が見つかり、直ぐさま丁寧に管理されるようになった。競馬場も計画された。既婚の将校の多くは家族をキャンプ周辺の山々に連れてきた。そしてマラカンド全体が急速に恒久的な駐屯地に変わってきた。平穏な日常がイスラム戦士たちの狼藉によって破られることは無かった。キャンプを離れる場合には必ず拳銃を携帯することが義務付けられていたが、人々はみな弾を込めないままにしておくか、地元民の馬使いに持たせておくかしていた。山中では趣味としての狩猟が行われた。クリスマス週間にはポロ競技会が開催された。高貴な訪問者、国会議員でさえ、この大英帝国の前哨基地を訪れ、アングロサクソンがどのような土地に対しても自分たちの趣味や生活習慣をいともたやすく適応させてしまうということを興味深く観察していた。

しかし、同時に、マラカンドでの駐留生活は快適とは言いがたいものだった。マラカンド旅団に所属する者は、二年間、キャンプの幌布の下やぼろぼろの小屋で厳しい気候にさらされながら生活していた。暑くともプンカー（インド式大うちわ）も氷もなく過ごしていた。ここは鉄道から五〇マイルほど離れており、娯楽や交際は完全に放棄されていた。英国騎兵隊の将校が、周囲

の反対や費用の問題など様々な障害を乗り越えて、ようやくこの辺境に着任したとき、彼は辺境軍の將校たちを嫉妬の目で見てしまふだろう。というのも彼が求めるような待遇を、辺境軍の將校たちは当たり前のごとくのように享受しているからだ。しかし、このような辺境軍の待遇は、何か月もの間、人里離れた場所で孤立して不快で単調な駐留生活をしていることの代償であり、また、名誉ではありながらも、敵の脅威に曝されていることの代償であることを理解するべきである。

マラカンド峠を過ぎた後、すぐ右に曲がるとスワート溪谷に至る。そこはもう山の中である。どちらを見ても岩壁によつて視野がさえぎられる。溪谷自体は広く、平らで肥沃である。川が溪谷の真ん中を素早く流れている。兩岸には稲田が広がっている。その他の作物は乾いた土地に植えられている。村落がいくつも存在し、そのうちのいくつかはたくさんの方々の住民を抱えている。これは美しい光景だ。冷たい山風が太陽の熱を和らげている。ふんだんな雨水が大地の緑を保っている。

古代、この地には烏仗那または「ウツディヤーナ」と呼ばれる仏教国があつた。ウツディヤーナとは公園のごとくであり、かつての支配者たちは自分たちの快適な国のごとくをそう呼んだ。中国の僧、法顕（ほっけん、Fa-hien）は五世紀にこの国を訪れ、このように言った。「人々はインド

中央の言葉を話している。インド中央とは『中央王国（＝グプタ朝）』のことである。一般の人々の衣食は中央王国と同じである。烏仗那では仏法が大いに栄えている。「この「公園」はスワート川（「蘇婆伐卒堵河（Subhavastu）」と呼ばれていた）兩岸全体を含んでいるが、より限定的に言えば、川の上流側のことを指しており、森林や花々や果物で有名であった。スワート渓谷は今でも美しさをとどめているが、凶悪で無知で先見の明を持たない征服者たちによって、森林は破壊され、花々や果物は減少していった。

スワート渓谷の現在の住民が受ける評価は酷いものである。悪名高く冷酷な人々の間でさえ、スワート渓谷の住民の危険な性質は別格のものだと見なされている。パサン族の間では「スワートは天国だ。しかしスワートの住民は地獄に住む悪魔だ」と言われている。長い間、スワートの住民は卑怯者の烙印を押され、周辺の部族から侮蔑され、怪しまれていた。しかし、最近の戦いぶりによって、スワートの住民は少なくともその汚名を濯いできた。

今は少数の族長が割拠してスワート渓谷を支配している。しかし、一八七〇年までは一人の支配者によって治められてきた。スワートのアフクンド(Ahkund)ははじめ牛飼いだっただ。インドでは牛飼いは名誉ある仕事と見なされていた。なぜなら牛は聖なる動物だからである。彼の仕事は神々からも人々からも受け入れられるものである。諸侯の中には、必ずしも熱心に主張するわけ

ではないが、“Gulowar”直訳すれば「牛飼い」という名に誇りを持つものがある。そのような意味合いのある仕事についていたことから、アフクンドはやがてある靈感を得た。彼は何年もインダス川の岸に座り、瞑想をした。そして彼は聖者となった。彼が岸辺で瞑想を続ければ続けるほど、彼の神聖さは増していった。彼の名声は地域全体に広がった。スワートの住民はアフクンドにスワート溪谷に住むよう懇願した。アフクンドは、最初は威厳の保持と駆け引きのためにスワート住民の申し出を固辞していたが、ついにはインダス河畔からスワート河畔に移動することにした。数年間、アフクンドは緑豊かな溪谷に住み、人々から敬意を受けていた。インド大反乱（セポイの乱）の際、スワートの王、サイド・アクバルは死に、聖者アフクンドが聖俗両方の権威を受け継いだ。一八六三年、彼は英国に対する聖戦（ジハード）を宣言し、アンベラ戦役においてスワートとブネルワルの住民を率いた。このシルカル（宗教指導者）が戦争終結までに示した力量は長老たちに強烈な印象を与えた。戦争の終わりに際し、彼は友人たちを政府に送り込み、友人たちから敬意を受けた。

一八七〇年、彼は死ぬ前に人々を周りに集め、このように宣言した。いつの日か、この溪谷はロシアと英国の戦場になるだろうと。そして、その時には英国側につけと。この遺言はバラード（物語詩）の中で「英国精神」として伝えられ、偉大な宗教指導者アフクンドの記憶とともに部族民の心に深く刻みつけられている。

アフクンドの二人の息子は死んでいる。しかし、彼には二人の孫、「スワートのミアングルたち」がいて、スワート溪谷に住み、アフクンドが保有していた土地自由保有権を受け継いでいる。彼らの政治的影響力は小さいが、ミンガオラ近郊のサイドウの墓所で神聖な香りの中に眠っている祖父のおかげで、スワートの人々からも英国人からも敬意を受けている。

マラカンドの東方八マイル先にはチャクダラの信号指令塔が見える。そちらの方へと、幅が広い段々になった道がまるでリボンが平地を横切っているかのように延びている。コタルのキャンプから七マイル先には南方の山脈から突き出したアマンダラ峠がある。アマンダラ峠を過ぎて北側に曲がるとスワート川にまたがる要塞化した橋が現れる。この道は歴史的なものなので、読者は記憶にとどめてほしい。この道は単にマラカンド野戦軍の進撃ルートとなっているだけでなく、マラカンド野戦軍の存在理由ともなっている。この道が無ければマラカンドキャンプも、戦闘も、マラカンド野戦軍も、この物語もなかったことだろう。この道はチトラルへと続いている。

さて、ここで一度、辺境政策に関する全体的な疑問を取り上げてみよう。英国はチトラル街道を確保するためマラカンド峠を保持している。チトラル街道を確保するのはチトラルを保持するためである。チトラルの保持は「前進政策 (Forward Policy)」に従うものである。そこで私はこ

の本の冒頭で書いたようなことに直面する。この本は軍事行動や小さな事件などについて記述することを意図したものである。しかし、同時に、英国の知識人やインドの専門家の間で意見が分かれるような問題についても触れている。私は読者から大いなる共感や同意を得るだろうが、その一方で読者には、私が重要で意見の分かれるような問題に関する記述を本書の後ろの方に先延ばしした等とは思ってもらいたくない。本書を読み終わった時、私の著述の姿勢に非が無いことがわかるだろう。

慎重であるほど躊躇するようになる。しかし、チトラル保持の是非が保留されている間は、不必要かもしれないが、この章でチトラル保持の手法について記述することが好都合である。

ノウシエラにはチトラル街道の鉄道基地がある。そこからマルダンまで街道が続ぎ、さらに辺境を横切っている。ここから、この街道の新しく、そして係争中の部分が始まる。街道は、まず下ラニザイ (the Lower Ranizai) 地方を通過し、マラカンド峠に上る。そして、スワート溪谷まで下り、上ラニザイ地方と下スワートを通過し、チャクダラ (Chakdara) に至る。街道は要塞に守られた立派なつり橋を通ってスワート川を渡る。この橋は三スパン、全長一五〇〇フィートあり、一八九五年に六週間で建設された。軍事工学の傑作である。スワート川を越えて街道はデイル (Dir) のカーンの領土を通過し、北東に向かい、マラカンドから三十五マイル離れた、サド

ウ (Sadu) という地味な村に至る。ここまでは第一区間であり、ここから先は鉄道では進めない。街道はラクダ道になり、パンジコラ (Panjkora) 川の左岸に沿って曲がりながらデイルから五マイル以内の場所に至る。そこで街道はつり橋を渡って川の右岸に渡る。そして街道はデイル川の分岐点に至る。さらに街道はデイル川に沿って続き、サドゥから五〇マイル離れたデイルに至る。デイルから先はラクダでは進めない。デイルから先が第三区間で、ラバだけが進める六十マイルの道となっている。デイルから先の道は、工学の偉業ともいえるものである。街道はある場所では切り立った巨大な崖に突き出した栈道となっており、別の場所では驚くほどジグザグになった道になったり、急斜面になったりしている。街道の終点はチトラル要塞である。この要塞には二個大隊の守備兵と一個中隊の工兵が駐屯し、二つの山砲がある。

街道は街道沿いの部族に守備・管理されている。しかし、二つの主要地点は大英帝国の守備隊によって保持されている。マラカンド要塞は山道を守っている。チャクダラ要塞はスワート川の橋を守っている。残りの部分では街道沿いの部族がインド政府から金を受け取って守備している。ラニザイ族はインド政府から年間三〇〇〇〇ルピーを受け取り、その一部を使って、スナイドル銃を装備した二〇〇人の非正規兵を揃えている。これらの非正規兵は英国士官からは "Catch-'em-alive-Os" というあだ名で呼ばれている。これらの非正規兵のおかげで掠奪者たちは追い払われ、暴力や殺人が抑制されている。デイルのカーンの領土の中を街道が七十三マイル通



っているので、カーンはインド政府から年間六〇〇〇〇ルピーを受け取っている。その見返りにカーンは街道守備のために四〇〇名の非正規兵を供給している。

平野からマラカンド峠に至るまでは、この仕組みはうまく機能していた。街道の管理をする部族民は政府に敵対することには消極的だった。マラカンドの南部、下ラニザイの部族民はみなそうだった。部族の長老たちは血気盛んな若者からすべての銃器を取り上げ、英国軍を攻撃することを禁じた。上ラニザイの住民は戦鬪的で、それほど本気ではなかったものの、迷信や恐れからムラー（宗教指導者）に従っていた。スワートの住民は狂信的で我を忘れていた。デイルのカーンは完全に英国の支援を必要としていたため、ずっと英国に対して忠実に振舞っていた。カーンの領民もまたインド政府から得られる補助金の利点を理解していた。

街道のことが興味深ければ、その歴史もさらに興味深い。街道建設に至る事件や原因の概略を語ることは、辺境の部族の政治史と取り扱い方についてなんらかの示唆を与えるものとなるろう。

部族長たちは権力が不安定だったため、つねに強力な宗主国の支援を必要としていた。1876年、チトラルのメフタル（領主）、アマン・ウル・ムルクは保護を求めるように勧められ、大英帝国の家臣であるカシミール藩王の家臣となった。あらかじめ検討され、そして英領インド政府

によつて受け入れられた政策に従い、英国の出先機関が早急にチトラル・カシミール間の国境のギルギットに設立された。アマル・ウル・ムルクには一定の銃器と弾薬、そして六〇〇〇ルピーの補助金が与えられた。補助金はのちに一二〇〇〇ルピーに増額された。大英帝国はこうしてチトラルに利権を得、またチトラル国境の観測点を得た。一八八一年に英国の出先機関は撤収したが、影響力は残った。一八八九年にはより大規模な出先機関が再設立された。アマン・ウル・ムルクは、チトラルを統治している間、英領インド政府に大いなる敬意を示し、補助金とそれなりの平和を享受した。しかし、一八九二年、アマン・ウル・ムルクは、いずれも凶悪で野心的で悪辣な息子たちを残して死んだ。息子の一人、アフザルは、年長でもなく、継承権も認められていなかったが、運良く継承権を得ることができた。アフザルは権力を掌握し、捕らえられる限りの兄弟を殺し、メフタル（領主）を自称し、英領インド政府から承認を得た。彼は「勇氣と決断力のある男」と見なされ、また彼が支配することによつて政権が安定するだろうという見通しがあつたため、彼は元首として認められた。生き残つた兄弟たちは近隣諸国に逃走した。

年長の兄弟・ニザムはギルギットに来て英領インド政府に訴えたが、助けを得られなかった。神の祝福は既に授けられていたのだった。しかし、一八九二年十一月、故アマンの兄弟、シエール・アフズルが密かにチトラルに戻つてきた。シエール・アフズルは兄弟愛に駆られ、甥たち、すなわち、新しいメフタルとその兄弟とを殺害した。そして「凶悪な叔父」は即位した。しかし、

英領インド政府は即位を認めようとはしなかった。ここにきてギルギットにいたニザムの主張は認められ、メフタル（領主）の地位を取り返すことが許された。二五〇人のカシミール銃兵を得たことは、ニザムを精神的に支え、ニザムに多くの支持者をもたらした。これは規模を縮小し、オランダ人衛兵をカシミール銃兵に置き換えた、オレンジ公ウイリアム（ウイリアム三世）のイングランド上陸である。シエール・アフズルが送った二二〇〇人の兵はニザム側に寝返った。篡奪者たる叔父、シエール・アフズルは待ち続けることの危険性を察知し、ジェームス二世がフランスに逃げたように、アフガニスタンに逃げた。シエール・アフズルはアフガニスタンの支配者に厚遇され、後の争乱の種として丁重に扱われた。

いまやニザムは望み通りメフタル（領主）となった。しかし、彼は権力を大いに振りかざすことはなかった。あるいは、地上における野望のむなしさについて陳腐な省察を展開していたのかもしれない。初めから彼は貧しく不人気だった。しかし、英領インド政府の支援もあって、しばらくの間、彼は弱くみすぼらしい統治を続けていた。彼を指示する目的で、そして英国の方針で、ヤングハズバンド大佐が一〇〇名の銃剣武装兵とともにチトラルに派遣されてきた。ギルギットの駐屯兵は大隊規模に拡大し、ギルギットとマツジ間にいくつかの駐屯所が設置された。

こうして大英帝国軍はチトラルに入った。彼らはすぐに危険な状態に陥った。彼らは悪路と凶

暴な部族によつてギルギットから何マイルも隔てられていた。ギルギットから兵を送るのには時間がかかり、困難が伴うものと思われた。しかし、他のルートもあつた。それはすでに私が記述した道である。つまりペシャワールからデイルを通過する北方ルート。英国の勢力圏から始まり、鉄道を利用する、より短く容易なルートのことである。英領インド政府はこのルートに着目した。もし英国の兵士や駐在員をチトラルに留め置くつもりなら、つまり、英国の方針を継続するつもりなら、このルートを開通しなくてはならない。英領インド政府は本国政府に問い合わせた。キンバリー卿 (Lord Kimberley) は負担、すなわち勢力圏拡大による出費の増加を非難し、英領インド政府の提案への支援を取り下げるといふ返事をした。しかし同時にキンバリー卿はニザムが強くなることを期待して、英国の兵士や駐在員をチトラルに駐留させ続けることを認めた。(国務長官からの緊急指令、第三十四号、一八九三年九月一日)

ここにきてウムラ・カーン (Umra Khan) が登場しなくてはならない。一八九〇年四月二十八日付のギルギット駐在員報告によれば、この首長はジャンドウル (Jandul) のカーンで、バジヤウル (Bajaur) 全域に影響力を持つ、「チトラル〜ペシャワール間の最重要人物」である。この有力者のもとには、故アマンの息子の一人、アミルという人物が、シェール・アフズルによる殺戮を逃れて亡命していた。ウムラ・カーンはアミルを保護し、自分の利益のために利用しようと考えていた。一八九四年五月、この若者―アミルは二十歳前後だった―は、ウムラ・カーン

の手から逃れてきたと主張しながらチトラルに戻ってきた。アミルにとっては邪魔な存在であり続けてきたニザムは、親切にもアミルを受入れた。一八九五年一月一日、アミルはニザムに歓迎されたのを利用して、ニザムとチトラルの主要閣僚たちを殺害した。アミルはメフタル（領主）を自称し、承認を得ようとした。しかし、英国の役人たちは辺境政策に基づき、この事態についてなんらかの考慮がなされないうちは、この悪党のやり方には応じなかった。

ウムラ・カーンは直ちに大軍をチトラル溪谷の中心に進めた。親愛なる友人にして同盟者のアミルを助け、アミルの統治を安定化させるという名目で、しかし本当は自らの勢力圏を拡大したいという期待から。しかし、アミルはウムラの願望をよく知っており、自らの王国を手に入れた今となつては、ウムラとこの王国を共有する意思などなかった。戦闘が続いた。チトラル側は敗れた。アミルに利用価値がなくなるや、ウムラ・カーンは「凶悪な叔父」を招いた。シェール・アフズルは招きに応じた。交渉が始まった。シェール・アフズルはメフタル（領主）となることを主張し、ウムラはそれを支持した。双方とも、逆の結果となった場合には力に訴えると脅し合っていた。

しかし英領インド政府は激怒し、ウムラに関わることを拒否し、ウムラの主張は差し出がましきものであることを伝えた。そしてウムラに、直ちにチトラルから立ち退け、さもなければ深刻

な結果となるだろうと警告した。警告に対する答えは戦争だった。人員の少ない守備兵や点在していた英国兵が攻撃を受けた。第十四シーク連隊の某中隊は八つ裂きにされた。ファウラー少尉とエドワーズ少尉は捕虜となった。チトラル駐在員とその護衛はチトラル要塞に逃げ込んだが、要塞は十重二十重に包囲された。彼らを救うことが焦眉の急だった。野戦軍第一師団が動員された。四月一日、約一六〇〇〇人の兵士がマルダンを発つて国境を越え、チトラル要塞救出のため最短ルートを進んだ。この最短ルートとはスワートとデイルを通る道であり、現在のチトラル街道である。ロバート・ロー卿 (Sir Robert Low) が司令官に、ビンドン・ブラッド卿 (Sir Bindon Blood) が参謀長に任じられた。

今までのところ、まずチトラルにおいて、そして最終的には国境付近の部族全体において、大英帝国の影響力が公式の一貫した政策の下で、着実に増加してきた様子を記述してきた。ある行動には別の行動が続いてきた。そしてすべての行動には共通の目的があった。ここで我々は突然、ある行動に直面する。この行動によって、英領インド政府は長らくたどってきた道の上に障害物を見出し、多大な労力と多くの犠牲を払うことになる。

英領インド政府は良心の呵責から、というよりも問題を局所的な出来事とし、領土拡大の意図を否認することで自由党政権をなだめようとして、「ウムラ・カーンに従わないスワートとバジ

ヤウル(Bajaur)のすべての人々」に対して次のような声明を発表した…  
ウムラ・カーンが不法にも奪い取った領土を永久に占領する意図もないし、各部族の独立に干渉する意図もない。「一八九五年三月十四日付声明」

もしこの声明が国内政治向けに発表されたものだとするれば、ある意味では、見事に成功したと言えるだろう。というのも、この戦争で死傷した全ての兵士たちについて書かれてきたのに劣らぬぐらい、この声明について書かれてきたからだ。しかし、英国軍の姿を見て怒り狂い、英領インド政府の抗議に関心を払わない部族民には何の効果もなかった。部族民は、長期的で意図的なゆっくりとした英領インド政府の活動の進展を用心して見ていた。要するに、こういうことである… 英領インド政府が、インダス川の排水システム全体において影響力を拡張し、次第に統合することを公式に決定した際「英領インド政府からの書簡、No. 四〇七、一八七九年二月二十八日付」、部族民は英領インド政府の誠意を疑っていたようである。部族民は英領インド政府の活動内容を理解することができず、英国軍の活動の中に侵略行為のみを見出した。

部族民は次第に集結し、英国軍の前進に対抗した。一二〇〇〇人に達するや、部族民は要衝、マラカンド峠を占領した。彼らは四月三日、ロバート・ロー卿率いる英国軍を先導する二個旅団によって徹底的に打ち負かされ、この峠から追い払われた。さらなる作戦によってスワートとパ

ンジコラ川の通行が可能となった。チトラルへの道は開いた。城塞を包囲していた部族民は逃げ出し、ケリー大佐の指揮の下、解放部隊はギルギットから通り抜けることができた。ウムラ・カーンはアフガニスタンに逃亡した。ここで新たな方針を立てるといふ課題が英領インド政府に突き付けられた。

二つの選択肢があつた。一つは「チトラルの実効支配を継続する努力を放棄する」こと。もう一つは「チトラルに十分な駐留兵力を置く」ことである。枢密院は既定の政策に従い、全会一致で、チトラルにおいて大英帝国の影響力を維持することは「第一義である」と決定した。本国政府宛ての報告書「英領インド政府報告書、No.二四〇、一八九五年五月八日」において、英領インド政府は理由のすべてを表明し、同時にペシャワールからチトラルに至る道（この道があつたからこそ援軍を進めることができた）を維持しなければチトラルへの駐留は不可能であると述べた。

六月十三日、ローズベリー内閣は断固として、また（英知は無かつたとしても）果敢にこう回答した…「チトラルには軍事力もヨーロッパの代表部も置かれるべきではない。チトラルは要塞化されるべきではない。そして、ペシャワール―チトラル間には道が作られるべきではない。」この回答によつて、英国はついにそして完全に一八七六年から一貫して継続してきた政策を否定した。英国はチトラルを自業自得の苦しみの中に置き去りにした。英国は英領インド政府を過剰



に支配した。これは、国境線を旧来のものに戻そうとする、大胆で自暴自棄の試みだった。英領インド政府は次のように回答した。「我々は深く落胆しているが、決定を受け入れる」と。そして英領インド政府は、バラバラになった政策をまとめ直し、新たな織物を織り始めた。

しかし、自由党政権が倒れる直前になって、ローズベリー内閣は決定を翻した。インド問題に関する青書\*を読みながら、どんな無鉄砲な男でも大臣になった途端にかぶらざるを得ない公務上の責任という無表情なマスクの下に、政党本来の感情が揺れ動いているのを見出すのは楽しいことだ。報告のことは、形式、口調は同じだ。偉大な人々が総督たちや行政官たちを指導するのはいつものことである。しかし、政治の振り子が揺れるたびに、指導者たちの影響力は増したり減じたりする。一八九五年の揺れは非常に大きいものだったため、それに伴って前進政策は勢いづいた。新政権にとつて「歴代政権が採ってきた前進政策を簡単に放棄するべきではないように思えた。たとえその維持が明らかに無理になってきたとしても」「内務省報告、No.三〇、一八九五年八月十六日付け」。このため、チトラルの保持は公認され、チトラル保持のための道の保持もまたやむを得ないものであった。

\* 議会や枢密院の出す報告書。表紙が青い。

「背信行為」の問題は非常に重要な問題なので、神経質に取り扱わなくてはならない。兵士たちの功績に捧げることを第一の目的とした本の中で、政治家の名誉にかかわる問題を議論するのは、厚かましいことのように見える。英領インド政府は、各部族に干渉するつもりもなく、いかなる領域も恒久的に占領するつもりもなく、軍隊が通過するだけであると、不必要で根拠のない声明を発表した。しかしこの声明に反して、いまや英軍は部族民に干渉し、通過点となったダलगアイ、マラカンド、チャクダラに駐屯している。しかし、取引があつて初めて、裏切りがあるのだ。各部族は声明など気にしていなかった。彼には理解できなかったし、信頼していなかった。信頼の無いところに裏切りもない。国境付近の部族民は英国の勢力圏拡大に抵抗していた。その立場は声明を無効化し、部族民の承認を得ていないことを示していた。部族民は騙されてきたとは思っていないかった。彼らはチトラルへの道を「背信行為」とは見なさなかった。彼らはこの道を彼らの独立への脅威、併合の前兆だとみなしていた。そのどちらの間違ひではなかった。これまで私が書いてきたように、溪谷を横切る白く広い道、この道に沿って進む兵士たち、あらゆる方向に影響力を拡大している行政官たち、チャクダラの橋や城塞、そして拡大していくマラカンド峠の駐屯地に目を向ければ、たとえ教養がなくとも事の重大さを理解することができるだろう。また、どのような詭弁も事態を覆い隠すことはできないだろう。

(二〇一七年一月十四日、仮訳)

(二〇一八年三月二十三日、修正)